

第2回例会報告（2014年12月発信）

まずは、広島支部例会参加者で作った美しい紅葉をお届けします。

下の写真をご覧ください。

「みんな風になあれ」「みんな落ち葉になあれ」

スカーフを使った体の動きが、なんともいい感じ。



この身体表現の絶妙なこと、落ち葉のはかなさと温かさと静けさの味わい。今日のリトミックは、日本文化の「わび」をも表現して

います。11月の最終日、広島支部は第2回例会を行いました。参加者は20名。今日も坂本先生のご指導のもと、体と心で音楽を学んでいきました。

学習の最初、坂本先生が静かに語られました。

「リトミックって、なあに？」今日のお話で私が最も印象深かったお話は、「子どものなかに、音楽を感じる心が、少しずつ少しずつ積み重なっていく……。リトミックをしたらすぐに子どもが変わる？ そんなわけではないのです」



現代は、すぐに変化や結果を求めたがる時代。でも、教育の実りは、本来ゆっくりのもの。子どもは、小さな感覚をいくつもいくつも蓄えて、やがてそれが感性になり、その感性が「人を思いやる心」や「ものの見方」のもとになり、いつのまにか自然に体が動いて、

人生が豊かになる。そのようなダルクローズの音楽教育観が坂本先生のお話をとおして、私のなかにスーッと入り込んできます。

さて、例会のすべてをご紹介するわけにはまいりませんが、学習の様子をトピック的にごらんください。

◆拍子を動く

拍、拍子を感じ取った体の動きは、リトミックにとって重要です。まず耳（聴覚）で、強い拍・弱い拍をキャッチ、次に目（視覚）を加えて、強い拍に向かう予備をキャッチ、そして音楽を聴きながら歩きます。拍子毎に歩く方向を変えます。

伸びた（長い）リズムを止めないこと。伸びた（長い）リズムは音楽が前に進んでいます。リズムを次のリズムにつなげること。音楽はつながっています。



このことを、動いて学びます。坂本先生が次のように紹介されます。「ダルクローズのあだ名は、『足のダルクローズ』。彼は、足で動いて音楽をとらえることの重要性を強調しました」



このことを、今日はもっと深めていきました。それは「補足リズム」。長い音符にうもれそうになる拍を拾い出して、リズム表現します。このかくれそうなリズムの取り出しが「補足リズム」といってよいでしょう。なるほど、「補足リズム」を表現すると、音楽性が膨らむような、音楽の流れと拍の流れとがピタッと一致した感じ。今日の大事な収穫です。



次回本年度第3回例会は、年が明けて3月1日（日）。来年は広島支部60周年。記念の年も向けてさらに飛躍してまいりたいと思います。どうぞ、多数のご参加をお待ちしております。